

井伏鱒二「多甚古村」同時代受容分析

松本和也

I “流行作家”としての井伏鱒二

昭和一〇年代半ば、井伏鱒二は“流行作家”と称される地位にあつたようだ。山時鳥「流行作家の実体」(5) 井伏鱒二の巻」(『読売新聞』昭一五・五・二四)では、『井伏文学の流行は、大部分そのユーモラスな希有な感触に基くと見てよい』と、何よりそのユーモアが注目され、次のように論じられている。

井伏の流行を支へてゐる読者層は簡単に見究めはつかないが、想ふに、笑ふ群衆のなかでは苦虫を噛みつぶしてゐて、独りになつて初めて澄んだ心で笑ひを求める氣むつかしい、しかし氣持に或る余裕のある現代人の一部であらう。作家一流のユニークなユーモアによって支持される井伏は、さらにモチーフとその捉え方、文章も特筆に値するという。

彼の作中には多く世俗のそれ自身別に特色もない人物が描かれてゐるが、それらに対す彼の照明の当て方が面白く、一見簡素に見えてその実、微妙な屈折とリズムをもつた彼の文章がその面白さを二重にも三重にもしてゐる。(五面)『一見／その実』といった井伏をめぐる語り方は、本稿でも追つて検証していくが、昭和一三年には「ジョン・万次郎漂流

記」其他ユーモア小説による第六回直木賞受賞があり、それは『大衆文学』と「純文学」の境界が再定位され始めていたこの時期、「大衆文学の新生面」を待望する動きの一環(二)だと位置づけられている。また、『多甚古村』の舞台化、映画化が、井伏を“流行作家”にみせたことも確かだろう。ただし、それは小説評価の後の話である。ならば、井伏が流行した契機(転機)となつた出来事・作品)はどこに見出せばよいのか。こうした興味関心からK・F「文学的人物論 井伏鱒二」(『文藝』昭一四・一一)を参照すると、そこには次の一節がみられる。

時が経つた。／民衆の智慧を軽んじた者が退くべき時が来た。井伏鱒二の名を圧してゐた名が、一つ二つ、小さくなつて行つた。その時である。再び彼が新しい姿で立ち現れたのは。(二〇八頁)

井伏のポテンシャルを抑圧してきた『名』が時の経過によつて消え、『多甚古村』は、再び民衆の智慧の明るさを、前よりもしつかりした腰つきで我々に示すことになつた(二〇九頁)というのが、右の引用に孕まれた具体的な内実である。そうであれば、この時期に井伏の名を高からしめた直接の契機は、やはり『多甚古村』だということになる。同作については、東郷

克美に研究史上の論点を集約した、次の概評がある。

この作品はよくも悪くも戦前の井伏文学のひとつの到達点であった。庶民的なるものへの強い関心、非情と詩情との混濁、庶民生活に接する機会の多い職業の人物を中心にすえての連鎖的方法などその後の井伏文学、とりわけその長篇小説の根幹になるものが、ここに出揃っている。しかも、この作品には日中戦争下の、いわゆる「非常時」体制の影が落ちていて、時局に対する作家の姿勢を窺うこともできる⁽¹⁰⁾。

こうした評言をふまえ、本稿では井伏鱒二「多甚古村」の同時代的相貌に注目していく。というのも、小説表現に即して《出揃っている》とした東郷の指摘は、それと連動しつつ、同時代の作品受容・作家評価についてもいえ、そこには戦後とは異なる井伏評価（論点）も原型として出揃っているからである。

ここで、以下の議論の前提として、同時に井伏鱒二評価のポイントを探る意味でも、主要先行研究を发表順に検討しておく。『多甚古村』について、《この作品は面白くはあつたけれど好きになれなかつた》という寺田透は《作者の世俗的興味が弾みすぎてゐる》点を難じて、次のように論じている。

ここにあるのは人間に対する愛情といふより、世態人情の面白さに釣られた興味の動きなのだ。〔略〕話の種は深刻であらうと多彩であらうとそれらを扱ふ井伏の目は世間話に身を入れた人間の心のやうにひどく通俗的で大まかなのだ。ただ一つの美点は、その興味の度の強さと、一人一人の人間が持つ善のかけらに対する彼の愛情だけである

寺田は通俗にすぎる点を難じた上で、それに対する作家の興

味の《強さ》と《愛情》とを《美点》⁽¹¹⁾ だとして救いだす。

《中日戦争の中で書かれた作品の大部分》について、《文学的形象化ではなくて、いわばレビュー化》だと否定的な見解を示す杉浦明平は、《全作品の中で最も有名だがしかし凡作》という評価を付しながら「多甚古村」に言及する。《主人公、語り手として「年のころ三十前後の（駐在所の）巡査」がえらばれたことは意味が深い》と指摘する杉浦は、《それはこの作品の性格を決定して人情漸たらしめたから》⁽¹²⁾ だとして、《中日戦争の下にある小さな田舎町に次々におこる諸事件はそれぞれに日本社会の大破局を暗示する深刻な悲劇の相を帯びていたはずなのに、この作品では、正に人情巡査の眼をとおして映つたままに、愛国美談の変種、新聞の雑報記事の蒐録以上には出ることができない》⁽¹³⁾ という限界を抱えこんだ点を批判している。

『多甚古村』を《井伏鱒二の作品の中で、いちばん通俗的に成功した作》⁽¹⁴⁾ だと紹介する佐々木基一は、《それだけにまた主人公たる駐在巡査の正義感や人情の通俗性を指摘する評家がたえない》のだとしながら、さらに次のように述べている。

作者は戦時下の、ものを書くことが多分に窮屈になりはじめた時期に、権力の代行者たる駐在巡査に自らを仮托し、国家非常事という大義名分をかかげることのでかえって、これら名もなき民衆の悲惨と愚行の数々にあくなき興味をそそぐ自由をかせいたかの如くである。

ここで佐々木は、時代背景を積極的に導入しながら、巡査という視点人物と《非常時／民衆生活》という作品設定に、作家の《窮余のはてに考へついた苦肉の策、一種の韜晦戦術》を見出しては、《戦時下の片田舎の風俗絵巻》⁽¹⁵⁾ だと要約している。

また、『流行作家』となった井伏鱒二の読者層（支持層）に論及する中村光夫は、『氏は昭和の初期に出発したいはゆる純文学の作家のうち、新聞小説に成功しなかった、或ひはしようとも試みなかった唯一の作家』だとその独自性を指摘した上で、『広い女性の読者を捕へなかつた代りに、氏は男性の選り抜きの読者を持つてゐます』²⁵と論じており、山時鳥評に重なる。

『氏は賢明にも摩擦を避けて、干潟にはさざら波、梅の村に入るといふ牧歌的な農村に舞台を設定し、およそ警察官という概念に当てはまらないような、善良で無邪気な巡査を持ち出す』と、『多甚古村』の設定に言及する杉森久英は、その巡査に『當時の支配者たちへの作者のちよつとした嘲笑や蔑視の気持の痕跡』を見出しつつ、それが『どんなに疑い深い目にも気取られないくらい、隠微なもの』だと述べ、『それほど重苦しい』・『時代の空気』²⁶をかいくぐる、井伏の戦略的抵抗を見出している。

このような『多甚古村』への批評言説の蓄積の後に、研究史は展開されていく。田辺健二は『多甚古村』は戦争を謳歌する国策文学ではないにしても、批判精神を欠いた、間のびのした風俗小説に墮してしまつた²⁷』と否定的な評価を下したが、田辺同様、日中戦争下における井伏の姿勢に注目した前田貞昭は、作品内外の要素を丁寧に検討し、次のように論じている。

井伏は、一方では「非常時」「時局柄」「戦時中」といった類の語彙を安易に使用して、国家権力の指向するところに、（決して積極的とはいえないのであるが）知らず識らずのうちに同調すると同時に、他方では、貶価していえばジェスチュア次元であるにしても、身近なところに見うる権力的存在に対する批判の目も持っていた。『多甚古村』（本

編）は、このような中途半端なところに成立している。

つまり前田によれば、『国家権力との関係を視野の外に遠くけ、問題を巡査という身近なところにとどめ』たことで、『多甚古村』という人間模様を描く舞台背景を確保した²⁸のだが、それは同時に『国策宣伝でもなく、暗い農村ルポルタージュでもない』、『多甚古村』（本編）の場²⁹を成立させることに成功し、それゆえに時代への同調を余儀なくされもしたという。

前田の『多甚古村』理解の対極に位置するのが、『多甚古村』に『永久不変性』を見出す山田有策の理解である。『甲田巡査は一貫して老熟した男であり続け、少しも変容しない』ことが『多甚古村』が『都市』の侵入にも時代や時間の推移にも変容しないことと同一³⁰だとみる山田は、こうした普遍的な相貌を『多甚古村』の『最大の魅力』³¹だと評している。

その一方で、歴史的な読解も示されてきた。『さまざまな試行錯誤を重ねていくなかで、井伏は『多甚古村』によつて時代のモードに乗り、「流行作家」と呼ばれるようになった』と指摘する滝口明祥は、さらに『井伏もまた文学大衆化から「風俗小説」へという同時代の大きな流れのなかに位置して』おり、『その限りで総力戦体制に適合的に見える』³²と論じる。さらに滝口は、『多甚古村』のエピソード分析を通じて、『たとえ井伏がどのような意図を持っていたにせよ、『多甚古村』の構造を捉えて読む限り、どのような意味によつてもそれを「抵抗」とは言いがたい』³³と、戦争に対する姿勢³⁴を判じている。

以上、『多甚古村』先行研究をまとめておく。全体としては、一定以上の『多甚古村』の人氣・評価を承認した上で、戦時下の時局と、その中で駐在巡査を語り手とした設定が注目された。

内容に関しては、両義的な評価が示されてきた。モチーフとされた庶民の人情とその書き方(の通俗性)も、研究史で争点となった時局に対する作家の姿勢も、普遍性(非歴史性)を顕揚する立場も含めて、見解・賛否は割れている。その意味では、『多甚古村』の評価・位置づけはまだ固まっておらず、右に検証してきた一連の評言も含め、戦後井伏評価の関与も想定できそうである⁽¹¹⁾。しかも、『多甚古村』は『ベストセラー』になった割合に、作品享受の実態が未解明⁽¹²⁾なのだ。

II 初出「多甚古村」連作の同時代受容

本節では、初出「多甚古村」連作の同時代評を分析していくが、それに先立って各編の初出を確認しておく。

「多甚古村(一)」『文芸』昭一四・二二

「多甚古村駐在記」『改造』昭一四・二二

「多甚古村(二)」『文芸』昭一四・三二

「多甚古村の人々」『文学界』昭一四・四二

「多甚古村」『革新』昭一四・五

「多甚古村駐在記」『文学界』昭一四・七

これらがまとめられて『多甚古村』(河出書房、昭一四・七)として刊行されるが、その際、初出未詳の箇所が含まれる。

あらかじめ「多甚古村」評の主な論点を示しておく⁽¹³⁾と、a 作品評価(面白さ)、b 設定・形式(舞台・巡査・日記体)、c 作家性(井伏調)、d ユニークさ(ユーモア、ペーソス他)、e 芸術性(紙背の苦心)、f 批評性(作家の眼)、g 時局・戦争の七つである(以下、論点を亀甲括弧内にa～gで示す)。

第一作「多甚古村(一)」については、同時代評未確認。

同月発表の第二作「多甚古村駐在記」には、一一本の同時代評が確認できた。豊島與志雄は「文芸時評(2) 作者のモチーフ」(『東京朝日新聞』昭一四・一・三二)で、「独り楽しめた余りにか、却て面白みが少い」(七面)と、いつもの井伏による「面白み」を想定しながら作家性を指摘している(a・c)。「文芸時評(4) 筋と描写」(『中外商業新報』昭一四・二・三)の高見順は、「氏の小説はいつも趣味的な小説だが、いつものやうに興味を通して人生とぶつかつてあるといったところが、この小説には欠けてゐる」(五面)と作家性を見出しつつも、井伏作品にあるはずの批評性の欠如を難じている(a・c・f)。同様の批評は、「さして傑出した作品とはいへないまでも、この作者の持ちまへの人生や人間に対する、人情の温かさを示した作品として、好個の出来栄」だと、同作に一定の評価を示す立野信之「文芸時評(4) 愛情と風俗」(『都新聞』昭一四・二・五)にもみられ、「以前の作品にあつた、無理な作為もなくなつて、気持よく従いて行ける」が、「その代り以前にあつた人生に対する皮肉や諷刺が無くなつてゐる」(一面)点が批判されている(a・c・f)。対照的なのは、「作者井伏鱒二氏のお家芸に接する愉しさと気楽さを感じる」と、同作の井伏らしさを好意的に評する「文芸時評(3) 文芸雑誌の行方」(『読売新聞』昭一四・二・五夕)の武田麟太郎で、「駐在所巡査の日記の抄録めかしてある」が、「この人はいつても自由作文または綴方を書いて読者に、さうしたものが自然に持つ皮肉な批判を聞かせてゐる」(二面)と指摘し、従来通りの批評性を読みとっている(a・b・c・f)。他に短評ながら、深田久彌「二

月の創作(3)『養蚕』と『木と金の間』、『北海タイムス』昭一四・二・九夕)で『印象に残った』(三面)「a」、神田鶴平「創作時評」、『新潮』昭一四・三)で『相変らずの井伏調』(一五頁)「c」、上林曉「文学の歎びと苦しみについて 文芸時評」、『文藝』昭一四・三)で『牧歌的な明るさが見える』(二三一頁)「a・d」と、それぞれ論及された。

雑誌評においても、田邊茂一「文芸時評」、『文学者』昭一四・三)では『鱒二ものと云ふべきもの』(一五九頁)と、いつもながらの作風が読みとられ「c」、あるいは無署名「改造」、『三田文学』昭一四・三)では『ただこれだけのもの、面白いが、しかし取り上げて何かを云ひたいといふ切実さは何も起さない』(一七頁)と、同様の論点が否定的に論及されてもいた「c」。ただし、同時に絶賛評もみられる。その一つが、次に引く天下泰平「創作月評」、『文藝』昭一四・三)である。

田舎の駐在所の巡査の日記の形で、歳末年始に起つたその近傍のさまざまなユーモラスな事件を描いてゐるのだが、努めてユーモアに溺れず書いてゐるので、ユーモアの味が一層イキイキと輝いて来てゐる。人間の哀しみが出て来てゐるのだ。同時に、筆触も厳しくなつて清新さと澁刺味を加へて来てゐる。この作者一時スランプに陥つてゐたが、最近完全にそれを突破したやうである。(二六〇頁)

ここでは、同作の設定・形式から内容、作家性までが顕揚され、スランプからの脱出を認めるに十分な、読者を『本当に救はれたやうな氣』にさせるほどの芸術性が読みとられている「a・b・c・d・e・f」。もう一つは、『駐在巡査といふ觀察上の便宜な立場を持つて来て農村を見ようとしたこの作者の思ひ

つきのよさには感心する』とその設定を絶賛する、岡澤秀虎「文芸時評——二月の小説——」、『早稲田文学』昭一四・三)である。岡澤は同作の内容を、『農村(集団)の生活でなく、人間風俗』だとした上で、『だが相当立派な「芸」であり、相当練れた心境』、『ユーモラスのものも、生ではなく、くすんだ渋い芸術的な味を持つてゐる』と、作家の興味や芸術性、それを支える心境を、『然し高いものではない』と留保をつけつつも評価している。また、『題材がいいからこの芸術境が生きてゐる』という同作の評価に即して『成長』を指摘し、さらに『時代を自然に(無意識的に)受容してゆく天分は、瀧井孝作などより遙かに柔軟性があり、立派』(六六・六七頁)だと評して、時代性にも論及していく「a・b・c・d・e・g」。

このように、「多甚古村駐在記」は総合雑誌『改造』掲載だったこともあり、多くの同時代評が産出され、井伏らしさをベースに多彩な論点から論及され、復活を印象づけていった。

第三作「多甚古村(二)」については、同時代評未確認。

翌月発表の第四作「多甚古村の人々」には、五本の同時代評が確認できた。同作を読んだ「文芸時評【完】美しい心境」(『東京日日新聞』昭一四・四・二二)の水原秋櫻子は、『さういふ名の村に駐在する巡査の日記であるが、私は二、三ヶ月前に同じ作者の同じ題名の小説を読んだ記憶がある』と、初出「多甚古村」の連作という発表形態にふれ、『今月のものはその続篇であらう』と推測しつつ、次のような指摘をしている。

この駐在日記は、どこから読んでもよいものだし、又どこを読んでも微笑することが出来る。これがこの作者の筆の徳であるが、かういふ行き方をして読者を飽きさせないや

うにするには、必ずそれだけの苦心が費されてゐるのであらう。(五面)

水原は《どこから読んでもよい》という特質を好意的に捉え、それが《読者を飽きさせない》理由を、作者の紙背の《苦心》にみている(a・b・c・d・e)。もつとも、そうした特質は、神田鶴平「創作時評」『新潮』昭一四・五のように、《例によつて例の如し》(二〇〇頁)、つまりはマンネリズムと捉えられもしたが、田邊茂一が「文芸時評」『文学者』昭一四・五で《駐在巡查の日記、井伏調のかぎり乍ら、技神に入ると云つても過言でない》(二二七頁)と評したように、いつも通りながらも、その成果が高く評価されてゐた(a・b・c・e)。他にも、「文芸時評」『早稲田文学』昭一四・五の佐々三雄のように、《おもしろい、愉快な作品》であるがゆえに《かういふ特異な作家の存在は守られていゝ》(七六頁)といった率直なエールもみられたし(a・c)、逆に、《のどかな村の、駐在巡查の日記体を借りた世相ニユウスで、鱒二独得のペエンスに充ちた世界》だと同作を要約するS・Y・Z「文学界」『三田文学』昭一四・五のように、《楽しく読めるが、神経質な氏としては珍らしく粗奔なところが目についた》(一六四頁)と、批判されもした(a・b・c・d・e・f)。

総じて、本作では一定以上の作品評価を前提として、論点e芸術性(紙背の苦心)が注目を集め、そこが評価される場合は好意的な評価、そうでない場合は否定的な評価となる傾向にあり、つまりは、評価の分岐点がはっきりしてきたといえる。

第五作「多甚古村」については、同時代評未確認。

第六作「多甚古駐在記」『文学界』昭一四・七については、

六本の同時代評が確認できた。新聞評は、短評ならいずれも好評であった。古谷綱武は「文芸時評(四)」『国民新聞』昭一四・六・二九で、《私の愛読してゐる文章》だとした上で、《なにか親身な愛情のしみたものを書くひとは、今日井伏氏をおいてはない、私は尊重すべき才能と信じてゐる》(六面)と、文章とそこに孕まれた作家性を頌揚する(a・c・d・e)。《干渴にはさざら波、梅の村に入る》と云ふ句がそつくりあてはまる風景を持つ多甚古村の駐在巡查、甲田なにがしの日記の体裁を借りた聯作の一つ》だと同作を紹介する武田麟太郎は「文芸時評(4)詩と散文芸術」『東京朝日新聞』昭一四・七・二で、《ここで、読者は十分、井伏鱒二の描くペエンスある人間と事件を楽しむことが出来る》(七面)と、内容の面白さを読者に保証する(a・b・c・d)。他に、宇野浩二「八月の創作(4)我流文芸観」『北海タイムス』昭一四・八・一(一タ)でも、《可なり委しく書きたかつた》(三面)作品として論及された(a)。雑誌評では、神田鶴平「創作時評」『新潮』昭一四・八)では《相変らず飄々として面白い》(二〇八頁)と、いつもながらの井伏調が評価された(a・c・d)。その反面、《フライリップの「小さな町」を思はしめる配列で、此作家独特の作話は、相変らず面白いもの》だとする無署名「文学界」『三田文学』昭一四・八)では、《少し千辺一律の嫌ひがある》(二〇七頁)とマンネリズムに対する危惧が表明されていた(a・b・c)。《一篇一篇が読切りになつてゐて方々に発表され、全体を通して一篇になるといふ、日記体の小説》と同作を紹介する大井廣介「長篇中篇時評」『槐』昭一四・六)では、次のように絶賛された。

益々井伏文学の妙味を発揮してゐるが、観照者である駐在所巡査が、井伏調の余裕のうちに、素朴な正義感を蔵し、時おり意外に辛辣な批判精神を發散し、従来の井伏文学の『そらとぼけ』や『あはれ』の境地から一步進み出てゐる。(四九頁)

ここで同作は、発表形態・形式への論及から、作家性、批評性など論点網羅的に評価され、『事大主義な非文学の横行の中に超然として、一種の清涼剤たるを失はない』と、時代状況との対比からも評価された(a・b・c・d・e・f・g)。

ここまで検討してきた、初出「多甚古村」連作の同時代受容についてまとめておく。論点は、あらかじめ提示した七つにはほぼ収まっているが、設定・形式(b)と井伏調(c)については多くの同時代評で論及がみられた。後者については、肯定／否定のニュアンスがよりこまれるケースもあったが、いつもながらの井伏調のうちに心境の深化や成長が見出される同時代評が注目される。というのも、ユニークさ(d)、芸術性(e)、批評性(f)といった論点に關しても、同様の作品評価がみられるからだ。一見凡庸な様相を呈した井伏らしい小説表現は、ある見方からすればいつも通りなのだが、別の見方からすれば従来よりも高く評価すべき何かとして受容されているのだ。つまりは、結果的にせよ井伏作品が「わかる読者にはわかる／わからない読者にはわからない」という二分法で、読者を前者へと卓越化していく。もともと、いつもながらの井伏調と読まれても一定の評価はされるが、読者が初出「多甚古村」連作に何かを見出した時、その評価は飛躍的に高まっていくのだ(g)。

III 単行本『多甚古村』の同時代受容

本節では、単行本『多甚古村』(河出書房、昭一四・七)についての書評九本をとりあげ、同時代受容の分析を進める。なお、先の論点にh初出・単行本間の印象、をくわえておく。

管見の限り最もはやい書評は『井伏鱒二の「多甚古村」は、言葉どほり、私が近頃で最も愛読した本の一つ』だと同書を絶賛する、宇野浩二「文芸好著三種」『読売新聞』昭一四・八・一八夕)である。『遠く「朽助のいる谷間」「丹下氏邸」その他の頃からの愛読者である私は、単調であるやうに見えて単調でない、変化ないごとくに見えて変化のある井伏の作品は殆ど欠かさず読んでゐる』という宇野は、(本稿Ⅱ末でも指摘したように)「わかる読者」として自らを卓越化しながら、同時に井伏の変化＝成長を指摘する。さらに、その論点は、次のような菊池寛との会話によつて、より深められていく。

先達て菊池寛に会つた時、菊池が、「多甚古村」が如何にも面白いと述べた後で、「実に楽に書いてゐるね、」と云つたので、私が「あれで可なり骨を折つてゐるだらう、」と云ふと、「さうかね、」と菊池は云つた。この菊池の「さうかね。」に肯定の気持があつたので、私は嬉しかつた。私が「可なり骨を折つてゐるだらう」と云つたのは「多甚古村」を差すと共に、数年前の傑作『集金旅行』から井伏がこゝまで進まないやうに見えて進んで来たことをも意味するのである。(二面)

ここで宇野は、菊池寛を召喚しては「わかる読者」であることを相互承認しつつ、表面的な読解にとどまらず、論点e芸術

性（紙背の苦心）までを読みとつたことを強調している（a・c・e）。ちなみに、菊池寛も「話の屑籠」（『文藝春秋』昭一四・九）において『多甚古村』を「面白くよんだ」、《読後二、三日楽しかった》（三一九頁）と手短に賞賛しているが、宇野評をふまえて読めば含みのある評価といえる（a・e）。

こうした、井伏の一見凡庸な小説表現に、読者が積極的に論点e芸術性（紙背の苦心）を見出していく『多甚古村』評価に特徴的な規則に気づけば、無署名「新刊紹介 多甚古村」（『文学者』昭一四・九）における、《片田舎の駐在巡査の日記の形式をかりて、飄々たる作者のユーモラスな目が、到るところに光つてゐる》、《この作者の特質をもつともよく現はして、いよ／＼円熟の境地に達した感じ》（一四二頁）という評言も、
「わかる読者」の評価と考えられる（a・b・c・d・e）。

《井伏鱒二は一見何でもなささうな市井の些事から、ペーソスを湛へた人生詩を拾ひ上げてくる名人》だという「井伏鱒二著『多甚古村』（『早稲田文学』昭一四・九）の浅見淵は、「多甚古村」初出・単行本間の印象を次のように述べている。

僕は大部分雑誌で読んでゐたのであるが、単行本になつたのを改めて最初から読み返してみても、雑誌で読んだ時よりも大きな感じを受けた。「略」ジグザグした人生縮図、或ひは人生模型図を生彩を伴つて展開してゐるのである。

さらに《作品の出来栄》については、次のように《井伏鱒二最近の傑作》だと激賞していく。

いろいろな事件のうちどれ一つも上ずつて書かれてゐないし、出来るだけ流露しようとするペーソスを抑へてゐる。

そして、余情に深い味を滲みださしてゐるのである。／＼

みならず、作者の眼と駐在所の巡査の立場とがよくマツチしてゐる上に、背景を多甚古村といふ小さな村に限つたことが、この人生図をよく象徴的にしてゐる。（七三頁）

こうした浅見評は、『多甚古村』をめぐる論点を網羅的に顕揚する評言となつてゐる（a・b・c・d・e・f・h）。上林晩「井伏鱒二著 長篇多甚古村」（『知性』昭一四・九）も同様で、《甲田巡査といふ、三十歳位で、まだ独身の、一駐在巡査の駐在日誌》に《記載される人物達》は、《多種多様で、数十人に及んでゐる》（一九〇頁）と紹介した上で、上林は《それらの人々の醸し出す事件の大部分は、決して牧歌的と言へるほど暢気なものではなく、むしろ深刻な社会相の縮図を示してゐる》のだが、《読み過ぎながら、或は読み終つてから、われ／＼の頭に浮ぶものは、そのやうな深刻な社会図ではなく、作者の歌声》だとして、作家性を読みとつてゐる。さらに、それが《現代くらゐ作家が自分の歌を歌はない時代はない》状況下で、《何等の主張も立言もなく、只管人間の像を彫みつづけてゐる井伏氏の作品は、現代において最も信憑すべき作品》だと意味づける上林は、単行本化による受容を次のように語る。

僕は「多甚古村」が雑誌に分載されてゐた時分その一部分を読んで、あまりに面白可笑し過ぎはしないか、作者の関心がその方に走り過ぎて、従来の作品よりも底が浅くなつてゐやしないかと井伏氏のためにひそかに危惧してゐたが、今度全部を通読してみると、目釘はちゃんと打たれてゐて、微動だもしない井伏氏の世界が展開されてゐるのを見て流石に感服した次第であつた。（二九一頁）

浅見同様に上林も、「わかる読者」として網羅的な論点から

『多甚古村』を顕揚していた「a・b・c・d・e・f・g」。

また、S・A「井伏鱒二著『多甚古村』（『東京朝日新聞』昭一四・一〇・一五）では、『年のころ三十前後の巡査』の駐在日記の形」で、『そこに描かれてゐるのは、この巡査の眼で捉へた村のさまざまの出来事』だと『多甚古村』を紹介しながら、しかし『巡査の眼は、制帽の廂に隠れた眼ではなくて、一個の丸坊主の人間の眼であり、また同時に作者の眼』だとして、『井伏鱒二と云ふユニークな作者の眼がそのまま人間の眼の広さをもち、それが一巡査の眼を借つて、作品の世界を遍照してゐる』という見方を示していく。さらに、『この眼ほど厳しい選択と渋滞のない独断に恵まれた眼は珍しく、そこに、この作者独自の文学境が出現する』のだとして、『さまざまの出来事を通じて、多甚古村に交錯する人生の横顔が洗はれたやうな明微さで描き出されてゐる』と、一見凡庸な小説表現から『文学境』・『人生』を読みとり、『井伏氏の文学の昂揚』と位置づける。さらに、この評では『井伏氏の文学の与へるほのぼのとした喜びが、現代生活に如何なる意義をもつか』（八面）という示唆までが提示される「a・b・c・d・e・f・g」。

もつとも、書評欄でとりあげること自体が評価なのだから当然でもあるが、『多甚古村』書評には、『わかる読者』としての論点網羅的な顕揚の傾向が顕著である。こうした評価ゆえか、少し時期を空けてもなお、論及が途切れることはない。

大井廣介は「最近の小説に於ける諸傾向」「槐」昭一四・一（一）で、『さざなみ軍記』と併せて『多甚古村』を『絶品』、『井伏氏以外の誰もがなしとげ得なかつたある域に達してゐる』と評価した上で、特に『文学的表現の特長に天才的なこと』に注

目して、『書いても効果のないもの、労してその甲斐のないもの、文学的表現にわづらはしいもの、適しないもの一切合切が綺麗さっぱり払ひおとされ、読んで容易に豊かに形象を想像させる無類の配置がほどこされてゐる』（八二頁）と絶賛している「a・c・e」。

『此の作者の近來の傑作』だと『多甚古村』を評す「最近の長篇小説 完 完璧の仮構」（『帝国大学新聞』昭一四・一一・六）の河上徹太郎は、『材を一寒村の若い巡査の駐在日記にとり、その村の老若男女あらゆる種類の人々の行状を写すことによつて、世相と良識と詩情を現さうとしたもの』だと同作を要約した上で、その『形式』が『わが文壇でユニツクなはいふまでもない乍ら、さうかといつて外国文学には尚更類例のないもの』で、『氏の感受性を築くもの』は『その古風な無学な田舎者めいた扮装にも関らず、都会的で、文学的で、近代人の感覚』（七面）なのだと、『わかる読者』としてその特徴を指摘する「a・b・c・d」。

『創作を日常のこゝろの糧として生きてゐる人間には、ときどき創作の形で与へられるレクリエーションが必要』だという「長篇小説評③芹澤と井伏」（『都新聞』昭一四・一一・二三）の青野季吉は、『さういふ作品を恵んでくれる作家は滅多に無く、井伏氏などは稀有な存在』だと位置づけて、『多甚古村』を『ほのぼのとした喜びをあたへる長篇』だと評している。具体的には、『一駐在巡査の日記の形をとつたもので、時局下の村の空気、生活、さまざまの出来事が描かれ、随筆式の行方のうちに統一のない統一を見せ、次第にその若い駐在巡査の人柄のなかに読者をゆつくりと坐り込ませる、至妙な作品』だと、やはり『わかる読者』としてその理解を示しながら、『現在の『時』の感触なども、大上段に

構へた作品よりも、反つてかゝる作品に濃厚にあらはれてゐるのは、皮肉（一面）だとして、時代状況の反映までを読みとっている（a・b・c・d・e・g）。他に、宇野浩二が『文芸時評』2）井伏、高見の市井人（『読売新聞』昭一四・一二・二七）で、『井伏鱒二と高見順の作品』に、『その味はまつたく違ふが、持ち味を賞味されるところに共通するもの』を見出しては『好んで「市井の人」を題材にする事』にふれ、井伏に關しては『多甚古村』と『集金旅行』を例示し、『井伏は井伏流の見方で、外から、書き、高見は、高見流の見方で、内から、書く』（六面）と指摘している（a・c・f）。こうした、個別の論点にふれた『多甚古村』評においても、初出『多甚古村』連作と単行本『多甚古村』の論点a～hについて、それぞれのアクセントからの評価が蓄積されていった。

以上を総じて、本稿Ⅱ・Ⅲで検討した一連の同時代評が、言表の前提としてゆるやかに共有していたのは、一見凡庸な、しかし『わかる読者』にはわかる／わからない読者にはわからない『多甚古村』の小説表現を前に、評者Ⅱ読者が自身を『わかる読者』へと卓越化しながら、同作への賛辞を連ねていくという言表のパフォーマンスである。それは、『僕は多読の方ではないのでよく判りませんが』と謙遜しながら田畑修一郎が『井伏氏その他』（『早稲田文学』昭一四・一二）において『あまり目立つことなしに根のある仕事をしたのは井伏鱒二氏の「多甚古村」ではありますまいか』（四・五頁）（a）とした言表にしても、『井伏鱒二は当代稀れに見る作家』だと断じる林房雄が『我』と小説——文芸時評——（『文学界』昭一五・二）で『多甚古村』を昨年度の最高傑作として推す。文学にオリム

ピックがあるならば、『多甚古村』を選手として出す』（一五九頁）（a）とした言表にしても、等しく共有されている。

こうした、一見凡庸な『多甚古村』の小説表現の紙背に、『わかる読者』として読みとった芸術性の読解Ⅱ言表こそが、先にあげた論点を支え、一連の井伏評価を産出していく基底となつた、『多甚古村』・『多甚古村』受容を通じて顕在化した最大の特徴なのだ。逆にいえば、本稿での同時代評調査・分析の限りでは、『多甚古村』・『多甚古村』評を通じて、当時の文学場における論題との直接的な切り結びは確認できなかった。むしろ、文学場での文脈・動向以前に、本稿で検証してきた『わかる読者』の顕在化・受容の変容こそが、井伏を『流行作家』へとおしあげていった基底的な要因だったと考えられる。

IV “わかる読者” による支持の顕在化

本稿冒頭で掲げた問い——井伏鱒二は、いつ・何（作品）を契機として『流行作家』となつたのか、（戦後からのまなざしではなく）同時代の視座からみた時、『多甚古村』は具体的にどのように評価されていたのか——については、すでに本稿Ⅱ・Ⅲでの検証を通じて、『多甚古村』・『多甚古村』の発表・受容を契機として、昭和一四年に井伏鱒二が『流行作家』へと変貌していったことは、論点a～hに即して明らかにできた。

その上で、『多甚古村』受容に特徴的な、『わかる読者』による支持はいかにして成立したものか、という新たな課題が浮上する。この問いに直接こたえる準備はないが、足がかりは築いておきたい。まずは、『井伏鱒二の「多甚古村」は面白い』

と断じる、小林秀雄、「長篇小説評（3）井伏鱒二の本領」『東京朝日新聞』昭一五・一・一六）を次に引いておく。

多甚古村といふ村は、『某氏の句に「干渴にはさざら波、梅の村に入る」といふのがあつて、まだ梅は咲かないが、やがて咲けば、その句は多甚古村の一部の景色にそっくりあてはまる』さういふ村で十分であり、登場人物すべて単純化されてゐる。単純化と言つても概念化ではなく「略」独特な手法で行はれ、之は修練の末の手法であるから、文章は一見軽そうで目方はあるのである。井伏氏は「ジョン万次郎」の漂流談で直木賞を得たが、通俗小説家にはなれない人である。この人のなかにある詩人が許さない。（七面）

ここで小林は、『一見』・『人は直ぐ言ひたがるが』といったレトリックを用いて表面的な井伏理解を排しながら、自らを「わかる読者」へと卓越化した上で、内容よりは書き方『手法』を論じ、その紙背に『詩人』たるエッセンスを見抜いていく、（a・b・c・d・e）。すでに小林は、『定説是非 井伏鱒二の作品に就いて（一）』（二二）『都新聞』昭六・二・二四（二六）において、同様の論法で井伏評価を示していた。『作品を読む人々は、各自の力に応じて作者が作品に盛つた夢を辿ります』という前提を示した上で、『井伏鱒二の作品は、みな洵に平明素朴な外観を呈してをります、かういふ外観を呈してゐる作品は、深く辿る余地がない様に思はれ勝なもので、事実、彼の作品に対する世評はみな、この平明素朴とみる世間に展開されてゐる』（二四日、一面）と整理する。さらに、井伏の文章が『大変乙に絡んだものです、意識的に、隅々まで構成されてゐる』

ことに注目し、次のように論じている。

人々は、彼の文章の複雑を見ないのでせうか。そりや見ない事はありません、少し注意すれば、厭応なく眼に映るのですから。併し、つまりは見えないのと同じ事になるのです、と言ふのは、彼が文字をあやつつてゐる手元を少しも見ようとしなからです。手元をみないから、彼の文章の独特な機構をナンセンスと断じて了ふのです。もつと簡明な言葉で申すなら、彼の独特な文字を彼の心の機構として辿らずに、単なる装飾とみて了ふのです。（二五日、一面）

ここで小林は、井伏の小説を対象としながら、読者の非を難じている。「わかる読者にはわかる／わからない読者にはわからない」という二分法は、実は同一の作品に対する、二様の読者によるアプローチなのだ。従つて、本稿の検証に即せば、小説表現の変質に伴つて受容が変じたのではなく、同一の小説表現に対して受容の仕方が変じたと捉えるべきである。何しろ、戦後に中村光夫が指摘するように、『三十数年のあひだ、氏ほど一貫して変らぬ作風の人は他にゐない』^{（十五）}ほどのだから。時期を下つて『直木三十五賞経緯』『文藝春秋』昭一三・三）も参照してみれば、大佛次郎の『終始、人生に対する作家の瞳が行間に輝いてゐる』、小島政二郎の『行間に聞える井伏君の息使ひに、僕は詩を感じ、詩人を垣間見た』（三六二頁）という評言が読まれる。いずれも一見凡庸な様相を呈した井伏の小説表現に対して、「わかる読者」として芸術的に卓越した何かを見出すという語り方になっているのは明らかである。

そうであれば、戦前期の井伏とは、少なくとも昭和初年代から「わかる読者」の間では高く評価されていたのだ。それが、

「多甚古村」・『多甚古村』を契機として、前景化していくことで『流行作家』となっていたのだ。別言するならば、『多甚古村』・『多甚古村』を契機として、井伏に關して、自らを「わかる読者」だと言明する評者が増え、そうした言表の集積が、井伏作品に対する受容モードの変容をもたらしたのだ。

ならば、なぜその契機が昭和四年の「多甚古村」・『多甚古村』だったのか。本稿の域をこえるこの難問に際してこそ、改めて同時代の文学場における複数の文脈（の交錯）へと視野を広げる必要が生じるはずだ。その際、先行研究で指摘された大衆文学、風俗小説、農民文学、国民文学等々にくわえ、文化統制・検閲の進行にも配慮する必要がある。何しろ、井伏の書法によれば、表面的には書かないことが読まれ得るのだから。

〔注〕

- (一) 滝口明祥「純文学」作家の直木賞受賞——『ジョン万次郎漂流記』から『多甚古村』へ『井伏鱒二と「ちぐはぐ」な近代漂流するアクチュアリテイ』新曜社、平二四、一八五頁。
- (二) 東郷克美「多甚古村」の周辺——谷間から海辺へ『井伏鱒二という姿勢』ゆまに書房、平二四、一二八頁。
- (三) 寺田透「井伏鱒二論」『批評』昭二三・三、一一七頁。
- (四) 杉浦明平「庶民文学の系譜——井伏鱒二について——」『午前』昭二四・二、一一四頁。
- (五) 佐々木基一「解説」(井伏鱒二『多甚古村』岩波書店、昭三二)、一八七・一八八、一九〇頁。
- (六) 中村光夫「井伏鱒二論」(一)——自然と人生——『文学界』昭三二・一〇、一九三頁。

(七) 杉森久英「解説」(井伏鱒二『多甚古村』角川書店、昭三二)、一八〇頁。

(八) 田辺健二「多甚古村」論『近代文学試論』昭四七・九、三三頁。

(九) 前田貞昭「二つの「多甚古村」——日中全面戦争下の井伏鱒二——」『近代文学試論』昭五九・一二、五三・五四頁。

(十) 山田有策「多甚古村」——古くて変らない世界——『解釈と鑑賞』平二・六、一二五頁。

(十一) 注(一)に同じ、一九三・一九四頁。

(十二) 滝口明祥「戦時下における「世相と良識」——『多甚古村』(同前)、一二七・一二八頁。

(十三) 東郷克美「解説」(井伏鱒二『徴用中のこと』中公文庫、平一七)に、『今日みる井伏文学総体の鬱然たる印象は、量質ともに戦後の作品をぬきにしては考えられない』(三七四頁)という指摘がある。

(十四) 堀部功夫「多甚古村」(東郷克美編『井伏鱒二の風貌姿勢』『解釈と鑑賞』別冊』平一〇・二、一三〇頁。

(十五) 注(六)に同じ、一九三頁。

〔付記〕

原則として、初出の「多甚古村」は一重括弧、単行本は二重括弧表記として区別した。なお、本研究はJSSS科研費15K02243の助成を受けたものです。

(まつもと かつや・神奈川大学外国語学部教授)